

第二十三回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

権左 武志 著 『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』

(2010年2月23日 岩波書店 刊)

権左 武志 ごんざ たけし 昭和34年(1959)生まれ。愛知県出身。専攻は、政治学・政治思想史。東京大学法学部卒業。法学博士(北海道大学)。北海道大学法学部助教授、同教授、北海道大学大学院法学研究科教授を経て、現在は北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授。

著書・論文には、『ヘーゲル体系の見直し』(共著/理想社)、『「正しい戦争」という思想』(共著/草書房)。「丸山眞男の政治思想とカール・シュミット」(『思想』903号・904号)他がある。

受賞のことば

この度、過去二十年の研究を集大成した最初の単著に和辻哲郎文化賞をいただけることとなり、大変うれしく励まされる思いです。本書は、この二十年余りに公刊された講義録等の新資料を利用し、また未公刊資料も参照して、ヘーゲル像を革新し再構成しようとした研究成果です。ヘーゲルが、彼の生きた時代に制約されながら、超越者と向き合い、歴史を超えた価値を問うことにより、現在まで生き続けている思想家であることを理解していただければ、著者として本望です。

和辻哲郎は、福沢諭吉らに始まる明治日本の西洋文化受容を受け継ぎ、日本文化の探求に生かそうとした戦前日本を代表する思想家だと思います。本書が、超越者や歴史の意味という、日本哲学が対決を避けてきたヘーゲル哲学の核心部分を取り出し、西欧文化への理解を更に深める上で寄与できるならば、これに勝る喜びはありません。

《選考委員評》

加藤 尚武

ヘーゲルという体系的な哲学を完成した西洋哲学の最高峰という大げさな評価もあったのだが、最近では政治的なパンフレットを書いたり、ジャーナリストの仕事をしたりという政治の渦の中のヘーゲルに関心が集まっている。「ヘーゲルの壮大な哲学体系」というのが、そのお弟子さんたちの作った虚像で、ヘーゲルを批判する立場にあったマルクスまでもが、「あの偉大なヘーゲル」を超えてみせるという姿勢を取ったので、その実像が見えにくくなっていったのに、資料の再開発などが進んで、実像が見えて来たのだ。

その中で、ヘーゲルが1820年に『法(権利)哲学』という本を出したときに、ちょうど学生運動が盛んになって、それへの思想弾圧も厳しくなったときなので、ヘーゲルが政府の御用学者としての姿勢を示すために、文章を書き換えたのではないかという疑惑が浮かび上がった。

権左武志「ヘーゲルにおける理性・国家・歴史」(岩波書店2010)は、このヘーゲルが筆を曲げたかどうかについて、たくさんの論文を引用して、現在までのところもっとも信頼のできるデータを分りやすくとりまとめている。筆者は政治学者で、哲学者の書いたヘーゲル像とは違った着眼点がある。

哲学の研究者の側からは、新資料を使ったヘーゲル論としては、山崎純「神と国家」(創文社1995)、栗原隆「ドイツ観念論の歴史意識とヘーゲル」(知泉書館2006)、滝口清栄「ヘーゲル法権利の哲学」(御茶ノ水書房2007)が刊行されていて、従来の哲学史は大きく書き換えられている。特に滝口氏の著作には権左氏があつかったのと同じ問題が、資料の紹介という形で丁寧に記述されているので、当面、次の研究課題はこの二つの記述の仕方を比較することからはじまるだろう。

『法(権利)哲学』の序文に書かれた文章が取りざたされているわけだが、問題はその本文の内容であるが、滝口氏の著作を見れば、ヘーゲルに変節の必要はなかったという印象に

なるのではないかと思う。

関根 清三

年度によって、抜き出た作品が一作あり選考委員の見解が一致する場合と、なかなか絞れないで選考が難航する場合がある。今年度は後者であった。著者半生の学的探究の結晶であり、綿密かつ膨大な資料研究である榊原哲也氏の『フッサール現象学の生成—方法の成立と展開』を筆頭に、謡曲ではなく芸道論に特化して才気ある読解を物した西平直氏の『世阿弥の稽古哲学』や、英米系の時間論を批判して独自の見解を打ち出そうとした伊佐敷隆弘氏の『時間様相の形而上学—現在・過去・未来とは何か』、カトリック神学の人格論の集成展開である稲垣良典氏の『人格《ペルソナ》の哲学』などを推す声もあったが、結論として権左武志氏の『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』が受賞作に選ばれた。

権左氏のお仕事は、ヘーゲル哲学の展開を異文化の創造的継承のプロセスとして捉え、そこにアクチュアルな示唆を読みとろうとする。未知の草稿や講義録が続々と刊行されつつある一九七〇年代以降のヘーゲル研究は、従来のテキストが各年度の講義の寄せ集めを編集していたことを批判し、これを年度ごとに解体して、異同と展開を精査する方向へと進みつつある。権左氏はそうした研究動向を踏まえ、歴史哲学・法哲学の講義の年度ごとの展開に、さらには遡って初期ヘーゲルの思想形成に、異文化との衝突ではなく、融合の対話的姿勢を読み取ろうとする。

現代の論者がマルチカルチュラルな視点から主観的に読み込むことと、ヘーゲル哲学の完成した意図を客観的に読み取ることがどう関連するかについては、更に伺いたい気がする（特に第一章）。また、この二十年間に四度ドイツへ在外研究に赴かれた著者だからこそ、ドイツの研究史の整理（第六章）だけでなく、ドイツ人の研究と正面から切り結んで、独自の批判と論拠に基づく新しいテーゼを打ち出すような、積極的な国際的貢献も今後期待したいように思う。しかし何よりも、そうした期待をいだかせるような、ヘーゲルの政治思想をめぐるチャレンジングな書物がここに公刊されたことを、喜びたい。

黒住 真

今回、いくつかの優れた本を読んでその内容をじっくりと追い求め、それぞれ感心することがとても多かった。というのは、現代日本のとくに文科系の「学術」は、乗り越えるべき問題を背負っている。つまり、細かな実証に入っても実際の世の中との関係を殆ど失ってしまったり、あるいは逆にかなりいい加減で一般受けすることだけが目標になってしまったりする——そのどちらでもない中間を形成することが要請されている。そう考えながら読ませていただくと、それぞれ方向は様々だが、その〈中間〉を背負った大事な学術書だと改めて思ったわけである。

そのうえで、わたし自身の関心に寄せて考えさせてもらおうと、とくに権左武志『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』と稲垣良典『人格《ペルソナ》の哲学』との二著からさらに考える方向を示された感がした。稲垣氏のご本は、和辻哲郎・倫理学が展開する基礎ともいえるカントの人格性が、中世哲学に遡ると実はさらに幅広い位置付け中にあることが示され、わたし自身は日本仏教の修行論との比喻をも考えさせられた。

また権左氏はヘーゲルの世界観・歴史観というべきものを大きくしっかりと捉えて示す。ヘーゲルは、丸山眞男・日本政治思想史では、ある種の全体主義を含んだものとされ、その乗り越えが歴史となっていた。ただ、ヘーゲルにせよその乗り越えにせよ、そのモデルはヨーロッパ中心主義ではないかと日本史の側からは見えていたのである。ところが、権左氏のご本は、ヘーゲル自身の文献を遡るとき、そこに並存する文化接触・地平融合が方向としてあるとする。またヘーゲルの理性論の中心にあるキリスト教的な三位一体観が、当の教理を越えた信知の広がりがあることを示す。このあたりは従来の素人がいさぐ狭いヘーゲル観を壊しながら哲学および宗教の可能性を示す有り難い地平を与えるものであった。

お二人のご本は無関係なようでも実は信・知の論として繋がっているとわたしには思え

た。ただ稲垣氏の本書は、さらにその中世哲学研究と合わせて理解すべきだろう。また権左氏のヘーゲル論は、意外にも現代の国家を越えたグローバルな世界史に方向をもつものだろう。この現代的状況からも、権左氏のヘーゲル論が示すものの意義は大きい。政治思想・法哲学といった次元の研究を含め将来に大きな期待を持っている。